

Living the LOTUS

Buddhism in Everyday Life

1
2014

Special
Issue

年頭法話

『悦びを伝えよう』

立正佼成会 会長 庭野日鏡

目の前の人を大切に する取り組みを 一層大事に

あけまして、おめでとうございます。

昨年十一月中旬、オーストリアのウィーンで「第九回WCRP(世界宗教者平和会議)世界大会」が開かれました。開祖さまが同志と共に創設されたWCRPが、四十数年の歴史を重ね、世界大会も九回を数えたことに感慨深いものがありました。

世界大会では、『他者と共に生きる悦び』がテーマとされました。このことは、すでに本会の会員の皆さまが、日々の出会いの中で実践し、実感されていることであらう。世界の平和も、身近な家庭や地域に調和を実現することが原点です。目の前の一人ひとりを大切に
する取り組みを一層大事にしてまいりたいと思います。

また私は、世界大会でのスピーチに際し、東日本大震災の惨禍に触れて、世界の諸宗教者

から寄せられた支援にお礼を申し上げます。被災地では、今も多くの方々が避難生活を送られています。福島第一原発の事故による深刻



な影響も続いています。身心両面の疲労が増しておられるに違いありません。本会としても、被災した方々の心情を大切に、息の長い支援をさせて頂きたいと考えております。

大聖堂建立-----開祖さまの願いは「一人ひとりが真の信仰者に」

さて私は、「平成二十六年次の方針」を次のように提示しました。基本的には、昨年、一昨年と同様の内容ですが、一部を新たにさせて頂きました。

今年は大聖堂建立五十一年目の門出の年といたします。

本会は平成十年以来、『一人ひとりの心田を耕す佼成会』との総合目標を掲げてまいりました。

そして、平成二十年からは、全会員へのご本尊勧請を推進し、取り組んでいます。

この歴史的経過により、仏教の三宝帰依の基本が成就されました。

私たちは未来に向け今から常に、釈尊及び開祖さま・脇祖さまの慈しみ思いやる、人間本来のころ(明るく 優しく 温かく)を大切に、菩薩道(人道)を歩んでまいりましょう。

付記一

私たちは、東日本大震災により、お亡くなりになった方々への慰霊・鎮魂の礼を忘れることなく尽くしましょう。

古典の言葉に「一年計画ならば穀物を植え

るのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を育てるのに及ぶものがない」とあります。

この中には、今後の世界に思いを馳せる時、食料安保の問題、原発・環境問題など、種々、私たちの眼を開かせるものがあると思います。穀物・樹木を植える体験をすること、人材育成への取り組みをすることなど、個人レベル・支部レベル・教会レベル・教団レベルで、取捨選択して実践し、地域社会・国家・世界に貢献いたしましょう。

本年は、昭和三十九年(一九六四年)の大聖堂建立から五十周年という節目を迎えました。その年は東京オリンピックが開催され、日本人の世界旅行が自由化されました。開祖さまと母に同伴して、私はインド仏跡を参拝させて頂いた意義深い年であります。

この半世紀、大聖堂は、在家仏教の本会の根本道場として、心を磨き合う修行の場となってきました。開祖さまのご法話をはじめ、信者さんの体験説法、法座などを通し、どれほど多くの方々が気づきを得て、心の転換をはかってきたことでしょう。五十年という歴史の重みをしみじみと感じます。

大聖堂に、仏教の精神、開祖さまの願いが象徴されていることはご承知の通りです。ご本尊には、「久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊」(久遠の本仏)が安置されています。大聖堂が円型なのは、法華経が「円教」と呼ばれ、「完全円満な教え」であることが表されています。聖壇

の上に掲げられた大菩提樹、また三菩薩像、大尖塔、宝塔などにも深い意味が込められています。

しかし、大聖堂建立にあたり、開祖さまが何にも増して望んでおられたのは、会員一人ひとりが、真の信仰者であって欲しいということでした。

「東洋いや世界に誇る宗教殿堂は出来上がったけれども、説くところの内容は御利益信仰を一步も出ていない。態度、動作もなっていない。或いは又、安置される仏像そのものが救って下さるのだと、仏像だけを拝みに大聖堂に来られるということでは、せつかくの大殿堂も空虚な伽藍にすぎないものになってしまいます」。当時の機関誌紙には、同様のお言葉が数々見られます。

さらに「お釈迦さまの教えは、あくまで〈真理を覚り、真理にしたがって生きよう〉という智慧の教えなのです」と明快に説かれています。

半世紀は、「反省期」に通じるともいわれます。いま、改めて開祖さまのご指導を自らに問いかけ、信仰のあり方を振り返ることが、大聖堂建立五十周年の大事な意義と申せましょう。

法燈継承後、私が皆さまにお伝えしたかった中心の願いも、開祖さまと一つであります。本会のご本尊は、釈尊の悟られた真理・法である宇宙の大生命を象徴したお像です。ご本尊を拝むとは、超越的な存在に頼ることではなく、真理・法に帰依し、随順して生きることです。言い換えれば、日々の生活の中で、自我を捨て、仏の見方に順い、実践していくことにほかなりません。

そのような意味合いを込め、昨年私は、『学び、実践する』と題して、年頭の所信をまとめました。

釈尊の教えは、単に知るというだけでなく、日常生活の中で実践するところに真価があること。それを開祖さまが身をもって示してくださったことなどをお伝えしました。

開祖さまの願いをかみしめ、 学び、実践し、伝えるという精進を

本年、「学び、実践する」と併せて申し上げたいのは、「伝える」ことの大切さであります。人間が、この世に生まれてきて最も高貴な幸福は、真理・法に出遇うことであるといわれます。そして、釈尊が奥の奥まで究め尽くされ、顕現された真理・法を、会得し実践して、人さまにお伝えすることが、真の慈悲であると教えられています。

真理・法をお伝えすることは、容易ではないと考える方がおられるかもしれません。しかし、私自身も、教会の幹部さんも、入会間もない信者さんも、みな同行者です。不完全なまま、至らないまま、自分の気づいたこと、感動したことを、目の前の人に、心を込めてお伝えすることが基本であります。

また家庭や職場、地域などで、何事にも感謝し、愚痴をいわず、一所懸命生きている方が大勢おられます。その姿に感応道交し、「あのような生き方をしてみたい」と思う人も自ずと出てきます。それも立派な布教伝道です。

悩みを抱えている人に寄り添い、ただ話を聞

いてあげるだけでも、どれほど相手の心が安まるかしれません。日頃、笑顔を心がけ、明るい言葉をかけることも、仏教の精神を発揮していることとなります。文書をお届けすることも、大切な布教です。教えをお伝えする形は、人によって、状況によって、数限りなくあります。

釈尊は、いかなるときも「遊戯三昧」の心境でおられたと伝えられています。布教伝道に歩かれる釈尊は、いつも楽しみや悦び(法悦)に満たされていたというのです。開祖さまも、太陽のような笑顔で、教えを説き続けてこられました。仏教は、まさに「自利利他円満」の教えであり、他の人にお伝えすることは、私たち自身の悦び、救われにつながることを忘れてはならないでしょう。

大聖堂の落慶式で、開祖さまは、こう述べておられます。

「大聖堂が完成し、久遠の本仏も安置され

たこのときに、私たちが改めて考えなければならぬことは、『これからが真の布教期なのだ。立正佼成会の布教史は、記念すべきこの日から第一歩を踏み出したのだ』ということです」

人々の救いのためには、常に前進し、創造していかなければならないという未来へ向けての気概が伝わってまいります。

私たちもまた、開祖さまの願いをかみしめ、今年を大聖堂建立五十一年目の門出の年と受けとめ、心をつにして、学び、実践し、伝えるという精進をさせて頂くことが何よりも大事であると思います。

そして、常に明るく・優しく・温かくという「人間本来のこころ」を大切にし、菩薩道(人道)を歩むことを通して、一人でも多くの方に、生きがいのある幸せな人生を歩んで頂きたいと願っています。

『佼成新聞』・平成26年1月5日号より

